

第40回 こうへ市民文芸

短歌部門

艶やかに咲く百日紅あの日母を紅蓮の炎呑み込みし跡

大濱 義弘

選評

黒崎 由起子

この一首から、二つの紅が浮かびあがる。震災当日、母を呑み込んだ火災の災と、復興を果たした街角に咲く百日紅の紅。この二つの情景の、時は違っても場所は同じであるという事実の重みが胸を打つ。何年月日を重ねようと、その跡がいかにかに整地されようと作者の無念の思いが消えることはない。空に朱の花を咲かせる百日紅の木が、まるで母の墓標のように立つ姿は衝撃的であった。

澄みわたる青空見上げ風を待つ白木蓮は飛翔のかたち

はなみずき

選評

早春のひんやりとした空に、真つ白な花を数多く咲かせる白木蓮。庭や街の街路樹として愛されている花である。作者はその大きな花びらが空に向かって咲く様子を、風を待つ姿と捉えることで、花の一輪一輪の命をクローズアップして見せた。澄みわたる空の青を背景に花の白が輝いている。春を迎え、新しい世界へ「飛翔」する者たちへの、エールのような清新な世界が広がっている。

食卓に夜勤を終えた娘の細い「いただきます」が朝を揺らせり

左藤 俊弘

選評

一夜の勤務を終えて帰宅した娘を迎える母の姿が浮かびあがる。母の用意した朝食に「いただきます」と応えた娘の声の細さに、娘の疲労を感じ取った母である。「朝をゆらせり」との表現には、その細い声を気遣う母の心の揺らぎが秘められているようだ。しんとした朝の気配が伝わる。いかに成長しようと子どもを思い、その日々が安らかであって欲しいと願う母の心が貴い。母の思いに支えられ、また新しい力を得られる娘であろう。

黒崎 由起子

うす青きアガパンサスの咲き初めて父のゐた夏頭ちあがりくる

伯野 洋子

選評

涼やかな青い花を球状に咲かせるアガパンサス、真っ直ぐに立つその姿は優しくもまた力強い。その花が咲く季節に亡き父を思う作者であるう。うす青いアガパンサスの光を透してみるかのように父と過ごした夏の美しさが視覚化されている。簡潔な表現が魅力的な一首となった。

黒崎 由起子

避難所で遊んだ記憶だけがある私が生きて今があること

入間 しゆか

選評

幼い頃の記憶のなかの「避難所」は「遊んだだけ」の場所だった作者が、成長するにつれ「避難所」が突然の震災で、自宅が崩壊し傷ついた人々が逃れてきた場所であったことを知るようになる。結句の「私が生きて、今があること」には、震災を経験した人々が助け合い立ち上がり復興された「今」を認識し、その地に育まれ生かされている感謝の思いが込められている。一首のなかに確かに息づく年月がある。

黒崎 由起子

秋彼岸縁者きたりてつくづく昔のままねとなみだぐみたり

川 端 美智子

選評

初句の「秋彼岸」が、読者を涼やかな秋晴れの日へと連れて行ってくれる。亡き人を忍び、祖先を供養し集まる縁者たち。久しく出逢わなかったこの世の者たちの和やかな語らいのひとつときであろう。会えなかった時間など飛び越え、昔のままの思いが戻ってくる。こんな柔らかな優しい時間のなかには、懐かしい亡き人の微笑みも寄せられているのではないだろうか。心温まる一首となった。

神戸芸術文化会議賞

葡萄の汁がシャツにこぼれてむらさきの空どこまでもひとりであった

一ノ瀬 美 郷

選評

真つ白なシャツに零れた葡萄の汁のむらさきから、作者は空に広がる夕暮れを連想されたのだろう。そしてその滲む「むらさき」から憂愁を、また孤独を浮かびあがらせ、広がる空間の虚しさを捉えられた。「どこまでもひとりであった」の独白が淋しい。また、この一首から、豊かに香る葡萄の房のひとつひとつの実も淋しさの集まりではないかなど、ふと思わされた。葡萄の深いむらさきを独自の感覚で表現された。

黒 崎 由起子

震災関連特別賞

震災を語り合う友今は亡く慰霊碑までも草に埋もる

寺尾隆志

選評

黒崎由起子

「震災を語り合う友」とは、共に震災を経験し当時の苦労を忌憚なく話せる得がたい友である。が、時が過ぎ街も身の巡りも変化し、友を亡くし、作者に取って失うことの多い年月だったのかもしれない。この一首から共感という言葉が浮かぶ。どんなに言葉を尽くしても経験した者にしか思いを分かってもらえない寂しさが漂う。世話をする人もなく草に埋もれる慰霊碑が、過ぎゆく「時」の象徴として残される。